
蘇える死体

ぴえろっと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇える死体

【Nコード】

N1492L

【作者名】

ぴえろつと

【あらすじ】

三年前、汚職事件の責任を被って自殺した男、大本。彼を、駅付近で見かけた中学生、才原。駅近くの公園に住んでいるホームレス、森岡。記者仲間からその報告を受けた二流雑誌記者、平野。平野の飲み仲間で平野からそのことを話された、下村。

才原は友人と共に、ゴールデンウィークを利用して、話し合う。

森岡は有り余る時間を武器に、聞き込みをして回る。

平野は記者として、そのことを追い回す。

下村は、半信半疑で、インターネットをいじる。

彼らはお互い、気づかぬうちに協力し合い、真実を見つけようとする。

才原裕一郎：序

今日も、俺の学校は、ニュースの話で盛り上がっている。他の学年になったことが無いので、分からないが、この学年は少々特殊でゲームの話題なんかより、政治の話などに花を咲かせる。

今日、話題になっているのはもちろん、汚職事件で、支持率が下っている、野党党首の公設第一秘書の自殺についてだ。

朝のニュースによると、その公設第一秘書である大本という男は『全て私の一存です』という旨の、遺書を残し、首をつつて自殺したらしい。

ただ、さっき聞いて回ったところ、俺の学年では、野党党首を批判する声が多く、大本はやっていないという意見が多かった。

森岡修吾：序（前書き）

一章一章が短くてすみません。

森岡修吾：序

ホームレスってえのは、暇なもんだ。今日仲間の情報屋が持ってきた、ニュースの中で注目すべきは、やはり大本という男の自殺だろう。

情報屋は、有り余っている時間を有効に使い、新聞の中身を記憶してくる。ほぼ完全にだ。だから、俺が思うに、情報屋ってえのはホームレスになる前は相当キレるやつだったんだと思う。

俺たちは、また、有り余っている時間を使い、そのニュースについて話し合った。意見は大きく、二つに分かれた。

『大本の遺書は事実だ』という意見と『そうではない』という意見だ。

ちなみに、俺は後者を支持している。

平野浩一郎：序 下村沙希：序（前書き）

一人ずつだと短すぎたので、二章まとめてお送りします。

平野浩一郎：序 下村沙希：序

三流、とまでは行かなくとも、一流ではない。二流といったところか。

俺は二流ゴシップ誌『ダイニング』の記者だ。今は、大本氏自殺についての記事を書いている。

二流雑誌っていうものは、真実でなくても人の気を引くタイトルをつけねばならない。俺は昔から、そう教わってきた。

それに習って、今、スキャンダラスなタイトルを考えているところだ。

五年ぶりにあった神成は、多少、老けて見えた。といっても、揃った目鼻立ちは、衰えることなく、三十三になった今も、モテるのだろうな、と思った。

今日は、五年ぶりの同窓会。前回会ったときは、皆二十八だったから、活気に溢れた同窓会だったけど、今回の同窓会は、しみじみと青春を思い出すものとなった。

神成は、中学三年生のときに出来た、私の最初の彼氏だ。私は、すでに結婚していて、子供もいるが、神成は未婚らしい。さっきも思ったけど、かなりモテると思う。

今回の同窓会には、前回来なかった、平野が来ていた。『ダイニング』という雑誌の記者をやっているらしい。

中学校時代、平野とはいいい思い出が無かった。私の事が、好きだったらしい平野は、神成のことを激しく嫌っていた。

そんな思い出を語らいながら、平野とメールアドレスを交換した。今では皆、いい思い出だ。

平野浩一郎：序 下村沙希：序（後書き）

前から言おうと思ってましたが、読んでくださっている方、本当に感謝しています。

ずうずうしいのは承知していますが、感想、レビュー、評価などしていただけると、うれしいです。更新スピードも上がるかもしれませんw

第一幕 才原裕一郎？（前書き）

土曜は更新できません。

毎日の更新も難しいです。二日ぐらい日が開いても許してください

（汗）

三日、四日なってくると、風邪などにかかった確率がありますw

第一幕 才原裕一郎？

ゴールデンウィークというのは、素晴らしいものだ。日々練習に明け暮れていた部員にとっては、いい息抜きだ。

とは言っても、ゴールデンウィーク中、部活が無いって言うのは、多少暇で、技術面からしても気になることが多いのだが。

久々の休日を利用して俺は駅に向かった。

大附駅の地下には、色々な設備がある。本屋、ゲーム屋、レストラン。それ以外にもたくさんだ。

そもそも、大附駅は、大附線という、電車の線の名前にもなっている、主要地区だ。

大附線の中では珍しい、急行停車駅だし、観光スポットは無いけれど、ボウリング場、カラオケなど、設備は整っている町だ。

駅に着いた、俺はまず、ゲーム屋へ向かった。モンキイズという名前のついたその店は気持ちの悪い、猿のマスコットキャラで有名だった。

お年玉を使う機会が無かったので、金はたくさん持っている。

俺は、ゲームを一頻り、見ることにした。

興味のあるゲームを見つけ、パッケージの裏の説明を見る。

このゲームを買おうか、そう決意したときに、誰かのひざが俺にぶつかった。

「す、すみません」

妙におどおどとした、その態度に、若干、イラついたが、「いえ」といって、その場は収まった。

レジに向かったとき、俺はその男の顔をもう一度見かけた。三年前自殺したはずの男、大本秘書のように見えたのは、気のせいだったのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1492/>

蘇える死体

2010年10月15日01時09分発行